

九 お慈悲の煙にまかれて

「劫濁のとぎうつるには、有情やうやく身小に、五濁悪邪まさるゆるゑ、毒蛇あくりゆ悪龍のごとくなり。無明煩惱しげくして、塵數のごとく遍満す、愛憎違順むみやうぼんなうなることは、高峰岳山にことならず。有情の邪見熾盛にて、叢林棘刺のごとくなり、念佛の信者を疑謗して、破壊瞋毒さかりなり」。如何に自性とはいへ困ねんぶつつた心中である。妄念は固より凡夫の自性とや、この自性何時やまることやら、悪性がいよく、魂に焦付いて、悪性魂になつたとは情なや。「五濁の時あしやう機いたりては、道俗ともにあらしひて、念佛信ずるひとを見て、疑謗破滅さきかりなり」。折角の御法義にまで又向ひするとは、よくく困つた代物かな。

千利休、或る時加藤清正・福島正則を初めとして、名將五人を招き茶を進せんりのきやうむ。此時加藤清正のみ大小を持つて茶室に入る。利休「茶は膽をねり心を柔このときかとうきよまさげ、相親睦して樂む所なれば、大小は外の室に置いて來られよ」と望めば、あひしんぼく清正曰く「これは予が魂にして予の身を離るゝ事はない」と、無理に室に入きよまささいはりて座し其の傍に置いた。蓋し清正は僅な事から利休を惡むこと甚しくい折を見て刺し殺してやらうといふ心組みであつたのである。利休もさるものをりそんな事は遠の昔に看破して居る。けれど素知らぬ振りて茶を立てやうと、かま釜から湯を汲み出す時、粗相の如くして其湯を一杯爐にこぼしたから、何ぞたまらぬたまらぬ、灰煙一時に立ち上り四方に散亂して、もうく雲霧の様であつた。しよしやう諸將皆起つて室外に飛び出す。清正も大小は打忘れ走り出た。あとりきやうで利休大笑ひに笑つて曰く「清正殿御身の魂が爰に落ちて居ますぞ」。

如何に剛硬難化の徒者でも、悪性止まぬ身の上でも、一度御慈悲の煙にいまかれてしまつては、邪見憍慢の矢も楯もたまつたものでない。吾を忘れてしやばく娑婆苦惱の魔境を飛出し、極樂淨土の次の間へ行かざるを得ぬ。「慈光はるか

にかむらしめ、光のいたるところには、法喜を得とぞのべたまふ、大安慰を
歸命せよ。武士の魂の何のと云つて、大小離さず座り込んだ清正も、室一
杯の灰煙には叶はぬ、覺えず魂も置き忘れて其室を飛び出した。魂忘れ
さしたのも其室飛び出さしたのも、すべて灰煙の御蔭。妄念は固より凡夫の
自性と悪性魂かゝへ込み、どつかと座り込んだお互も、魂置き忘れて、
仕合せな身になして頂く、大安慰を歸命せねばならぬではないか。

今となつては清正も、恨みの念絶え果てゝ、灰煙に對し感謝せねばならぬ
であらう。しぶとい吾等に妄念の悪性魂置き忘れさして、信心よろこぶ身
にして下さつた、御慈悲に向つては、何とも御禮の申様がないではないか。